

つくきびしい勝負である」(P34)といわれるところに、保育者の成長と源泉を見ることができるように思う。

この書物は、こうして、著者の十五年目の保育の四月から九月までを保育日誌的に順を追って書かれたものである。保育日誌的にとっても、それは事実の羅列ではなくて、保育者の眼が日日新たに開かれていく記録といった方がよいであろう。四月から九月までを大きくわけて、ゴチャゴチャ時代、こわごわ時代、なかよしみつけた、力を合わせて、自分の足で、グループで仕事、ちゃんとできた、というようにいくつかの段階にわけて記されているのもおもしろい。これは幼児のグループの発達の過程を示すのであろう。

平易な記述の中にたくさんのことが記されているので、読者は、ゆっくりよみなながら、技術の面で、教材の面で、幼児の発達の面で、具体的に多くのことを教えられるであろう。私がおもしろく読んだ一節を紹介しよう。

子どもがじっと見ているという場面に私

共はよくぶつかると。「見る」というのは、いろいろの可能性をふくんだたいせつな行動であると思うが、著者はそこから出発して、「見っ放し」の子にならないように、「じっと見て考えられる子にしたい」と思う。そのとき、「ここがこうなっていると思えたいものを知らせてしまうのでなく、あれ、あそこはどうなっているの？あれ、ここなんだろう？」と、疑問を投げかけるだけにしておく」さらに「子どもの目の動きをみつめ、心の動きをとらえ、子どもの心になって、あれ、こんなになつてゐるんだね、こうしてみようか、とヒントをあたえてみる」(P96)そうすると、子どもは、見て、やってみて、前進してゆく。保育者の心の動きがよくあらわれている。そして、こういう経験のつみかさねから、「よく見ることを知らずに育ってしまった子は、やってみることを素通りにしてしまおう」(P97)という著者の洞察による結論が出てくる。このような洞察的結論が、この書物を、たんなる記録にとどめず、保育学的価値のあるものにしていくと思う。

幼児の教育 第六十八巻 第二号

二月号 © 定価八〇円

昭和四十四年一月二十五日 印刷
昭和四十四年二月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
〒一〇一 振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします